

## 安部公房とエドガー・アラン・ポー（二）

——「異端者の告発」「どれい狩り」「第四間氷期」をめぐって——

### 糸賀寛

はじめに

安部公房（以下、公房と略）はエドガー・アラン・ポー（以下、ポーと略）を好んでいたことが知られている。ナンシー・S・ハーディンによるインタビュー「安部公房との対話」（一九九四年八月『ユリイカ』、長岡真吾訳）<sup>①</sup>で「ポーは、僕に書こうという気を起させた最初の作家でした。」とポーが創作の起点だったと明かし、座談会「科学から空想へ——人工衛星・人間・芸術」（一九五八年一月『世界』）では、ポーに見られる「発明発見の精神は、今読んでも非常におもしろい」と語り、対談記事「コードモとマス・コミ」（一九五九年三月『文学』）では、「ポーとかヴェルヌは、いまだに、文学そのものとして、正当に評価されない不満がある」と、ポーはもつと評価されるべきだとする。座談会「SFは消滅するか」（一九六一年八月『SFマガジン』）においては「ポオのね、気球にのる話があるでしょう。『ハンス・ブファール』か。あれ、傑作だと思うんです。」と賞賛している。座談会「小説の面白さ」（一九六六年四月『全電通文化』）では、「語りの文学なんかに通ずる一つ

の根幹的などいうか、そういうものに通ずるおもしろさ」がポーにはあり、それが自分の小説の発想に繋がっていると述べ、対談「共同体幻想を否定する文学」（一九七二年一月一日『図書新聞』）では、「ポーは、ぼく「公房」にとつて抜きがたい意味をもっていた」と語っている。このように公房はポーを高く評価しており、その影響も大きかったと推察されるが、両者の関係を論じた先行研究は非常に少ない。以上を踏まえ、本稿では公房が読んだ蓋然性の高いポー作品について論じた後、作品を比較し、影響関係を明らかにする。

### 一、先行研究

ウィリアム・カリーは「安部公房とポオ」（一九七六年三月『ユリイカ』）において公房とポーの類似点を六つ挙げている。第一は両者が物語作家として高い資質を持つ点で、カリーは「安部が、ポオのもつとも注意すべき特質と見ているのは、物語を創出するその天賦の才であり、「ポオと同じように、安部のストーリー・テラーとしての才能は、きわめて広範囲にわたる

多面性を見せている」と述べている。第二は物語を通じて特定のイメージを作り上げる点で、「ポオと同様、安部がただ単にストーリーのためだけにストーリーを語ることはほとんどない。物語を語りながら、安部はひとつの観念を展開してゆく——少なくとも、一つのトータルな現実のイメージを築きあげてゆく。」と主張する。第三に公房もポーも国や時代の影響が薄く、作品が普遍性を持つていることを取り上げ、ポーが「同時代のアメリカ人には「非アメリカ的」だ」とされた点と、公房が国内で「日本人よりむしろ外人を目当てにしている」と非難される点がある」という点を取り上げて「普遍性を作品に注入する能力」が共通項だと述べる。第四は両者が、「無意識の世界の現実を、悪夢的な、シュールリアリスティックなナラティブを通じて表現するが、しかし同時に、リアルなデテイルを忘れない」点であり、両者ともリアリティを持った奇妙な夢の世界を描いているとする。第五に、公房もポーも作品を通じて独特で単一な効果を作り出そうとしていることであり、ポーが自著で「作品で生み出すべきある独特で単一な効果」を重視していると述べていること、および公房が「単一の強力な普遍的なメタファーを選び、このメタファーを物語の基礎」としていることをカリーは指摘し、「安部におけるイメージの統一性は、ポオの効果の統一と多くの共通点を持つている」と結論づけている。第六は、ポーが生み出したとされる推理小説とSFの形式を公房が踏襲している点である。カリーは公房が「ポオが好んで使ったタイプの伝統的な推理小説のプロットの立て方そのまま」を利用しており、かつSFにおいても「ポオの伝統」に連なると主張している。

石原千秋は「安部公房「壁——S・カルマ氏の犯罪——」“パパ”の崩壊」（一九八八年三月『国文学 解釈と教材の研究』）において「ポーの『ウィリアム・ウィルソン』などにも、〈もう一人の私〉のモチーフが見られる。」と、両者にモチーフの共通点があるとしている。

また、岩田英哉は「安部公房の変形能力2…エドガー・アラ・ン・ポー」（二〇一二年十二月『もぐら通信』第四号、<http://w11allen.seesaa.net/article/310470292.html>、二〇一一年十月最終閲覧）において、「ポーの影響ははっきりしているのです。それは仮説をたて、仮説に従って小説を書くということであると述べている。岩田はポーの小説を「不可能事を設定して（例えば、密室殺人事件）、これが可能であると断じて話を展開」する「仮説設定の文学」だと解釈しており、公房のエッセイや対談を引用しながらこの概念が公房に引き継がれていること、および「安部公房が中学生の時に理解し、胸に抱いたポー像が晩年に至るまで変わら」なかったことを指摘している。

日高昭二は「幽霊と珍獣のスペクタクル……安部公房の一九五〇年代」（二〇一三年十二月、森話社、鳥羽耕史編『安部公房 メディアの越境者』メディアとパーフオマンズの20世紀②）所収）で、公房は、ポーを近代のSFの始祖とみなし、ポーからシエクレイに至る作家を「不可能性を仮定して、逆に現実への批判や風刺をこころみ」（日高、以下同様）た存在として認識していたと述べる。日高は、ポーを「科学時代の「商品」をめぐる一種詐欺的な行為」を描いた作家としており、公房の戯曲「少女と魚」（一九五三年七月『群像』）において「少女の眼から大量にあふれる涙が病を癒すという効能に反応した

社長夫婦や詐欺師のような博士が、その涙の「商品化」をめぐ

って暗躍」していたことや、短編「鍵」（一九五六年三月『群像』）に出てくる、「絶対に開かないという「鍵十字」を製作してその特許をめざしている」叔父が実は「錠前破りの兇状持ち」だったことを取り上げ、公房も詐欺や商品、科学技術を扱っていたと述べる。また公房の戯曲「どれい狩り」（一九五五年七月『新日本文学』）が、商品として扱われる珍獣が事件の焦点となる点で「モルグ街の殺人」と類似し、また、「タル博士とフェザー教授の治療法」に見られる「人間が閉ざされる恐怖を、逆に横溢する哄笑へと反転する」スペクタクルが、本作の構成に、「タル博士とフェザー教授の治療法」に「宥和治療法」が登場する点、本作で「動物磁気治療法」なる治療法が登場する点に、それぞれ影響を与えていると述べる。

藤井貴志は「マネキンの詩学」…安部公房の〈人形愛〉（二〇一七年一月『愛知大学国文学』）で、主人公が放浪した末に芸術家のアトリエに辿り着く点、そこで若い女をモデルにした芸術作品を見つける点、「芸術作品への入魂、それと引き換えのモデルの死」が起きたことを知る点で、公房「薄明の彷徨」（一九四九年一月『個性』）とポー「楕円形の肖像」が類似していると指摘している。

以上のように、公房とポーの関係は創作技法やテーマの類似性について包括的な叙述がなされているものの、具体的な比較は乏しい。先行研究中、個別の作品を取り上げているのは石原、日高、藤井だが、前二者は本文を照らし合わせておらず、具体的に影響関係を指摘しているのは藤井だけである。

## 二、安部公房の読んだポー作品

公房の親しい友人だったドナルド・キーンのエッセイ「安部公房ほど日本的な作家はいない——『安部公房全集』の完結に寄せて」（二〇〇九年三月『波』）には、「安部は外国語が出来なかった。（中略）学校で習う英語さえ片言も覚えなかった。」とある。公房自身も、「ドナルド・キーン宛書簡 第3信」（一九六八年四月）で「五月に大江健三郎君がアメリカに行くそうです。しかし、英語の出来ない私は、うらやましく思うだけで、彼の真似は出来ません。」と述べ、講演「言葉と肉体のあいだ」（一九七八年十月、早稲田大学小野講堂）でも「外国語の能力の低さときたら、誰も信じてくれないぐらい低いのです。自分で悲しくて、なぜこんなに外国語でできないかと思えます。」と述べている。これらのことから公房は英語が不得手であり、ポーを日本語で読んだと考えられるため、本稿では、翻訳について検討する。

インタビュー「内的亡命の文学」（一九七九年六月『国文学解釈と鑑賞』）で公房は、「僕らはそれ『世界文学全集』を、中学の終りから、旧制高等学校のはじめぐらいの年代に、つまり十五、六歳の時期に読んだ。」と述べ、「自筆年譜」（一九六〇年十二月、筑摩書房『新鋭文学叢書2 安部公房集』）でも「中学時代に、『世界文学全集』を読み、特にポーに強い印象を受け」たとあり、一九三九年から四〇年頃に世界文学全集でポーを読んだと推察される。対談「私の文学を語る」（一九六八年三月『三田文学』）には、「安部『世界文学全集』というのは、大体中学の終りから高等学校の一年ぐらいでほとんど読みまし

た。あったでしょう、昔の『世界文学全集』。／編集 新潮社  
でした。／安部 それから戯曲の全集。」とあり、新潮社の  
全集を読んでいたと分かる。国会図書館サーチによれば、一九  
三九年時点で新潮社が出版していた世界文学全集は『世界文学  
全集II ポオ傑作集 緋文字其他』(一九二九年一月、新潮社。  
以下『世界文学全集』と略)<sup>③</sup>のシリーズのみであり、これを  
読んだと考えられる。ただし、座談会「科学から空想へ——人  
工衛星・人間・芸術」(前掲)で「ポーの気球に乗って上る話  
があるでしょう、今からみればこっけいですが、ずっと上がつ  
て行くと地球がくぼんで見えたというんですね。」と、『世界文  
学全集』未収録の「ハンス・プファールの無比の冒険」(原題：The  
Unparalleled Adventure of Hans Pfaall)に言及している。後のエ  
ッセイ「SFの流行について」(一九六二年九月『朝日ジャー  
ナル』)で読点や表記を一部変えて引用したものが、谷崎精二  
訳「ハンス・プファールの無比の冒険」と考えられるため、こ  
れと訳文が同一の『エドガア・ポオ小説全集 第二巻』(一九  
四一年七月、春陽堂)・『妖精の嶋』(一九四七年十月、蒼樹社)  
・『ポオ小説全集 一』(一九四八年四月、春陽堂)のいずれか  
を読んでいた可能性がある。本稿では、より広く比較を行うた  
め、作品収録数が最も多い『エドガア・ポオ小説全集』を採用  
する。また、「SFの流行について」(前掲)では、「メェルス  
トルムの大渦」と「物言う心臓」(原題：The Tall-Tale Heart)  
の名前も出しており、後者について国立国会図書館編『明治・  
大正・昭和 翻訳文学目録』(一九五九年九月、風間書房)に  
よれば、「物云う心臓」というほぼ同じタイトルで収録してい  
るのは谷崎精二訳の『赤き死の仮面』(一九一三年七月、泰平

館書店)<sup>④</sup>と『赤き死の仮面』(一九二〇年六月、言誠社書店)  
のみであるが、収録作品と訳文は同一なため、どちらを読んで  
いたかは確定できない。本稿では、より発行日の新しい言誠社  
書店版を参照する。以上を踏まえ、『世界文学全集』・『エドガ  
ア・ポオ小説全集』・『赤き死の仮面』を、公房作品と対照する。

### 三、「異端者の告発」と「ウィリアム・ウィルソン」

小説「異端者の告発」は、一九四八年六月『次元』に発表後、  
作品集『夢の逃亡』(一九六八年四月、徳間書店)に改稿版が  
収録された。

「異端者の告発」の「僕」は、近来、人類が「他人と歩調を  
合わせることに出来ない人間」を許容しなくなったため破滅に  
瀕していると感じており、自分を告発して異端の存在を示すこ  
とが破滅を回避する術だと考えている。「僕」は連日警察や裁  
判所等を訪ねるが、相手にされない。ある日、居酒屋で会った  
男に「——ご注意なさった方が良いでしょう。危険な訴訟狂が町  
をうろついていますよ」と囁かれ、驚いた「僕」は翌日から「転  
々と店を変え」たが、どこに行っても男は「僕の居る店に」来  
たため「僕」は男へ憎悪を募らせ、ある時、ナイフで殺そうと  
するが、男の忠告に気を削がれてやめる。翌朝「僕」は、「自  
分の顔」が男と同じであること、彼が「僕」が以前住んでいた  
町の、百年前の市長Xにも似ていることに気付く。以降、男は  
Xと呼称される。Xの正体を探るため汽車で町へ向かった「僕」  
は、車内で「自分を人類の敵と信じ込んでいる」「僕」を「危  
険極まる」とするXの社説を読み、Xが「僕」の「決意をはば

もうと」してしていると感ずる。町で「僕」はXに遭遇し、Xが「最後の忠告として、貴方がその馬鹿げた告訴を中止する余地を残してあることを申し上げて置きますが……さもなければ、やはり、瘋癲病院に行くより他ないでしょうね」と語りかけてきたため反論するが、返事はない。不審に思つてよく見ると、そこにいたのは銅像で、「僕」は「彼[X]は単に幻影にすぎなかつた」のかと考える。元の町に戻つた「僕」は、わざと警察に捕まり、「言わなくても良いと思ひながらXの風貌」について話したため、警官から「そりやお前の顔の説明じやないか」と怒鳴られ、瘋癲病院に入れられる。

有村隆弘は「安部公房の初期の作品(2)『異端者の告発』…ニーチェの影響——リルケ、ニーチェ、カフカ——」(一九九五年三月『言語文化論究』)で、本作冒頭部分がニーチェ「愉快の言葉」(原題: Die föhliche Wissenschaft)に類似し、テーマに関して、ニーチェの主張した「神の死」と、「異端者の告発」で述べられる社会規範の崩壊が、絶対的なものが破綻しているという点で類似すると述べる。また、「異端者の告発」の主人公「僕」が、自身を訴訟してもらうために公証人・弁護士・裁判所等を連日訪れては拒絶される点と、カフカ『審判』の主人公ヨーゼフ・Kが自身の無罪を証明しようとして徒労に終わる点との類似、および「僕」がXに生き方の忠告をされる場面と、『審判』でヨーゼフ・Kが自身のとるべき行動について僧侶から暗示を受ける場面との類似を指摘する。

しかし、これらと別に、主人公とXの顔が同じである点、同じ顔の人間が主人公の行動を監視し、更に妨害しようとする点、それが言葉によって行われる点、主人公が同じ顔の人物を殺害

しようとする点で、ポー「ウイリアム・ウイルスン」からの影響も考えられる。

『世界文学全集』収録の「ウイリアム・ウイルスン」は、言誠社書店版『赤き死の仮面』にも「ウイリアム、ウイルソン」として収録されており、一部、句読点の位置や語彙が異なっている。本稿では、より出版日の新しい前者に拠る。主人公、ウイリアム・ウイルスン(以下、ウイリアム)は同性同名の男(以下、ウイルスン)に出会い、以降ウイルスンから、たびたび忠告されたため彼を憎む。ある時、ウイルスンの顔が自分に瓜二つだと知つてウイリアムは恐怖し、彼から逃げるためイギリス国内やヨーロッパ大陸を転々としたが、どこに行つてもウイルスンはやつて来て、事あるごとに忠告を囁いた。ウイリアムは、「私の計画を粉砕し、若しくは実行を妨げんが為めに」彼はつきまとい、「計画を実行したならば、それは却つて甚だしい禍ひを醸したかも知れない」場合に干渉していると考ええる。ローマで再び囁きを聞いたウイリアムは激怒し、剣でウイルスンを殺すが、直後に彼が自身の分身だつたと気づく。

両作品には、四つの類似点が見られる。第一は、主人公と同じ顔の人間が登場すること、第二は、「異端者の告発」では「僕」の分身としてXが、「ウイリアム・ウイルスン」ではウイリアムと同性同名で、顔も背丈も同じウイルスンが登場する。第二は、同じ顔の人間が主人公を監視し、人間・社会にとつて害になりそうな場合に限つて妨害してくる点で、両作品とも分身が主人公を付け回し、未然に害悪を防いでいる。第三は、妨害が言葉によって行われる点であり、「異端者の告発」では、Xの忠告が「僕」に告発や殺人を思い止まらせ、「ウイリアム・ウイ

スン」では、ウィルスの囁きがウイリアムの悪行を抑止する。第四は、主人公が同じ顔の人間を刃物で殺そうとする点である。「異端者の告発」で「僕」はXをナイフで殺そうとし、「ウイリアム・ウィルスン」ではウイリアムが剣で分身を殺害する。ドッベルゲンゲルを扱った作品は古今東西数多いが、同じ顔の分身が主人公の悪行を妨害する点が類似するため「異端者の告発」が「ウイリアム・ウィルスン」の影響を受けた蓋然性は高いだろう。

相違点として、以下の三つが挙げられる。第一に、「僕」は対象人物の殺害に失敗したが、ウイリアムは成功していること。第二に、「僕」の告発に関する考えがXと異なるのに対し、ウイリアムの行為はウィルスン、ウイリアム双方から「禍ひ」とみなされていること。第三に、「異端者の告発」では市民の「僕」と役職を持つXとで社会的地位が異なるが、「ウイリアム・ウィルスン」にそうした差はないこと。ウイリアムの行為は、社会規範上の悪行であり、ウィルスンは彼を咎める良心のような存在である。ここから、個人の内の道徳心と悪徳の葛藤がポールの主題だと考えられる。一方、公房作品の「僕」は、自分の告発が人類を救う善行だと考えているが、監視員や陪審員として権力側に立つXはそれを悪と考えている。「僕」が告発をしようとする契機は、人類が少数派を許容しなくなったからであるため、それを打開しようとする「僕」の告発行為は、マイノリティを排除し、人間を均一化しようとする社会への抵抗であり、社会的地位の高いXによる妨害は、権力からの抑圧と読めるだろう。つまり公房作品は、社会規範の変革者（「僕」）と権力者（X）の争いを主題とし、「僕」とXを分身関係にするこ

とで、それが内面でも起きていることを表したと考えられる。また、ポールと異なり、分身を殺害できずに終わることで、Xに象徴される同調圧力への志向が、個人の内部に強く存在していることを印象づけたのだろう。以上より、両者とも個人の内面的葛藤を扱っているが、ポールは社会規範における良心と悪徳を対立させる一方、公房はマイノリティへの共感と抑圧を対比していると考えられる。

#### 四、「どれい狩り」と「ちんば蛙」

未完の小説「奴隸狩」（一九五四年十二月・三月『文芸』をもとにした戯曲「どれい狩り」は、一九五五年七月『新日本文学』に発表され、改稿版が『どれい狩り・快速船・制服』（一九五五年九月、青木書店）に収録された。

「どれい狩り」の閣下と呼ばれる男のもとへ、探検家が、人間にそっくりで、短期間に多くの子供を出産する珍獣ウエーの雌雄一対を連れてくる。彼はウエーを「西部太平洋中央水域」にある未開の島で見つけたという。閣下は、ウエーに感激するが、娘の芳子は人間でないかと疑う。実際、ウエーは人間で、金をだまし取るため探検家の指示で演技をしていた。ウエーを労働力として各国に輸出しようと考えている閣下に、大臣は賛意を示し、彼らは探検家にウエーの生息する島への案内を依頼する。探検家と連絡が取れなくなったためウエーは自分達が人間だと告白するが、閣下はそれを認めない。押し問答をする内に、秘書の告発を聞いた大臣が、警官と共に邸宅へ押し入り、その場の人間を全員檻に閉じ込める。国家は一部の人間の口を

きけなくし、ウエーとして飼育する計画を立てていたのだった。大臣は、人生の苦しみから逃れるためウエーになりたがっていた芳子以外が、自分は人間だと騒ぐのを黙殺して、邸宅を去る。

先述の通り日高が本作と「モルグ街の殺人」・「タール博士とフェザー教授の治療法」の間に関連性が窺えると述べている。前者については、確かに両作品とも珍獣が作品の鍵となる点で共通しているが、物語展開や設定に類似が殆どなく、後者についても、日高の主張は抽象的であるため、いずれも具体的に影響関係を指摘しているとは言えないだろう。むしろ本作は、人間が珍獣のフリをする点、それが欺瞞目的で行われる点、末尾で獣の正体が明かされ、そのフリをしていた人間が抹殺される点が類似することから、ポー「ちんば蛙」に影響を受けていると考えられる。

「ちんば蛙」(以下、前掲『世界文学全集』に拠る)の主人公は侏儒の道化で、見た目と歩き方から、ちんば蛙と呼ばれる。彼の主である王は、七人の家臣と仮面舞踏会での仮装について相談しており、ちんば蛙にアイディアを求めるが、その際、酔った勢いでちんば蛙の恋人のトリペッタを侮辱する。その時、ちんば蛙は「素晴らしい趣向が」浮かんだと、燃えやすい素材を使って、「この物語のあつた時代には、文明圏では何処にも滅多に見られなかつた」「猩々」の仮装をし、八人を鎖で連結するよう提言する。喜んでこれを受け入れた王達の仮装を当日見た賓客の多くは、「この物凄い生き物を猩々と迄は思ひもつかなくとも、何か本物の獣だと想像」し、「多くの婦人は驚愕の余り気絶した」。暫くして、ちんば蛙はシャンデリアを吊るす鉤を使って彼らを天井に吊り上げて火をつけ、その直後、獣

の正体を明かし、協力者のトリペッタと共に逃亡した。

両作品には三つの類似点が存在する。第一に、他人の指示で人間が珍獣のフリをする点で、「どれい狩り」では、探検家の指示を受けた男女が珍獣ウエーを演じ、「ちんば蛙」では、ちんば蛙の提案を採用した王と家臣が、「文明圏では何処にも滅多に見られなかつた」「猩々」の仮装をする。第二に、演技ないしは変装が欺瞞を目的とする点である。「どれい狩り」では金の詐取を目的とし、「ちんば蛙」では王達が仮面舞踏会の参加者を驚かせることを、ちんば蛙が王達の殺害を、それぞれ目的とする。第三に、作品末尾で獣の正体が明かされ、演じていた人間が抹殺される点である。「どれい狩り」では、ウエーは人間だと暴露した演者が、大臣の策略でウエーとされ続け、社会から抹殺される。「ちんば蛙」では、ちんば蛙が王達を殺した後「猩々」の正体を告げる。

以上から、「どれい狩り」が「ちんば蛙」の影響を受けた可能性はあるだろう。

「ちんば蛙」は身分の低い男が、珍獣の仮装を利用して高貴な人間に復讐する話であり、身分をひっくり返すための頓智や復讐の達成が主題と考えられるが、「どれい狩り」では、そうした身分転位は起きず、人間をウエーに仕立てた探検家やウエーの演者は、ちんば蛙と違って権力者に対抗できないまま、ウエーとして監禁されてしまう。探検家の作り出したウエーという概念を利用して国家は金儲けを画策している点から、むしろ支配者の権力が強化されており、ウエー輸出事業のために一部の人間をウエーに仕立て上げようとしている点から、利益のためならば人権侵害も厭わない国家の残酷さが描かれていると言

えよう。ここから公房は、国益のために個人を犠牲にする理不尽さや、国家権力の強固さを主題にしたと考えられる。

#### 五、「第四間水期」と「ヴァルデマア氏病症の真相」

小説「第四間水期」は一九五八年七月から一九五九年三月にかけて『世界』に連載され、それを改稿した『第四間水期』（一九五九年七月、講談社）が刊行された後、更に改稿した『第四間水期』（一九六四年五月、早川書房）が出版された。

以下、「第四間水期」において、ポーの影響が窺える場面を概括する。予言機械を完成させた勝見博士は、試運転として偶然町で見かけた土田の運命を予言することになる。データ収集のため、助手の頼木と尾行したところ、土田は殺されてしまう。尾行していたことで嫌疑をかけられそうになった勝見と頼木は、予言機械を使って土田の死体に話を聞くことにする。勝見は研究を統括する官僚に死体を病院へ運ばせ、身体データを採取、それを予言機械に入力して機械内に土田の人格を再現した。勝見は、土田を質疑するも、自身が死者だと信じられない彼は聞く耳を持たない。そこで彼の記憶を事件当日に巻き戻して視覚情報を再現したが、犯人の顔は分からない。勝見は、頼木の提案通り機械の中の土田に「ベッドに寝ているのだと思いつまみせ」てから「復讐心をあお」ることで、事件の話を聞くことに成功する。

磯田光一は「解説」（一九七〇年八月、新潮文庫『第四間水期』）において、本作で描かれる、鯉呼吸できるように改造された水棲人の創出プロセスは、「遺伝」が「環境」によって

変えられることを実証した」「ルイセンコの遺伝学に近い思考に依拠」していると指摘し、鳥羽耕史も「安部公房『第四間水期』——水のなかの革命——」（一九九七年十月『国文学研究』）において、同様に述べる。また、鳥羽は、被害者の死体を分析する場面が、脳に電流を流すことで身体反応を観察できるとする、当時のソヴィエトの神経科学的知見とパブロフ生理学に基づき、電子計算機で神経を制御するという発想が、「一九四八年、アメリカのノーバート・ウィーナーによって提唱された」サイバネティクスに影響されていると述べる。哺乳類水棲化技術へのルイセンコ遺伝学の影響について、柚谷秀紀は「安部公房『第四間水期』論・SF・仮説・グロテスク」（二〇一四年十月『日本文藝研究』）で、ジャン・ロスタン『人間は改造されるか』（丹羽小弥太訳、一九五七年十二月、講談社）が具

体的な典拠だとしている。これらの指摘とは別に、先述した場面については、科学的技術を用いて死者と会話する点、死者ないしは瀕死の人物の肉体が、施術者からの刺激で動く点、死者への施術が実験を目的としている点が類似していることから、「ヴァルデマア氏病症の真相」に影響を受けていると考えられる。

「ヴァルデマア氏病症の真相」（谷崎精二訳、一九四三年五月、春陽堂『エドガ・ポオ小説全集 第五巻』）所収。以下、引用は、これに拠る。「私」は、死者への催眠術に関心を持ち、実験台として死期の近い友人ヴァルデマアを選ぶ。彼は提案を受け入れ、末期に催眠術をかけてもらう。「私」は、催眠状態のヴァルデマアと数度質疑をした後、かかりつけ医と相談し、死ぬまでそっとすることに決めて自宅に一旦帰り、翌日の

午後、再び彼のもとを訪れた。彼は未だ死んでおらず、催眠術の効能で一命を取り止めているように「私」には思われ、催眠術を解くべきか迷ったが、数日後に覚醒実験の実施を決める。

その際、医師の提案を受けた「私」が、ヴァルデマアに「君が今何を感じてゐるか、又は願つてゐるか、説明して貰へないかね？」と尋ねると、彼は「僕を眠らせてくれ給へ！——でなければ直ぐ！——僕を起してくれ給へ！」と叫んだ。「私」はすぐ覚醒の処置をとったが、その間にヴァルデマアの体は突然「忌まはしく腐敗した、むつとする様な、殆ど液体となつた肉塊」へと変わってしまった。

両作品には三つの類似点が見られる。第一に、科学的な手法で死者と交信する点である。「第四間氷期」では、予言機械が土田の人格を再現することで、勝見は死者と意思疎通でき、「ヴァルデマア氏病症の真相」では、「私」が瀕死のヴァルデマアに催眠術をかけることで、死後に彼と会話できた。

第二に、死者ないしは瀕死の人物の肉体が、施術者からの刺激で動く点である。「第四間氷期」では、死体を分析する際、以下の描写がなされる。

(前略) 数本の針が、体の各部にささり、壁にはめ込まれた何十本というランプの列が、縦横に組合せ(機械の言葉)を変えながら点滅していくと、それに応じて箱の屍体が、まるで生きてるように自由な運動を始めるのだ。運動は、足先から上半身へと次第にうつっていき、ついには唇をうごかし、目を見開かせ、表情筋までをも自由にあやつった。

一方、「ヴァルデマア氏病症の真相」では、「私」がヴァルデマアに催眠術をかけた際に、「彼の手は力なくはあつたが、容易く私の手が命ずるあらゆる方向へと動き出した。」と記述され、更に「私」の質問に対して彼は、「眼は眼珠の白い処が見える程大きく開き、唇を動かして応じる。物語の後半で、指示を受けても腕は動かなくなるが、それでも「私」の質問には「舌が顫へ動」いている。

第三に、死者ないしは瀕死の人間への処置が実験を目的とする点である。「第四間氷期」では、殺人の嫌疑がかかるのを防ぎたい勝見と頼木が、土田殺しの犯人を見つけるため彼の人格を再現するが、その一方で、

「勝見」「いいだろう。口実だけじゃなくて、「死者の再現は」実際にもやりがいのある仕事だな。屍体からはじめるってのは、たしかに名案かもしれないよ。」

「頼木」「まあ、言ってみりゃ、数学的帰納法の第一項になるわけですからね……それから、女が第二項だ……偶然だとはいえ、上手いサンプルがそろつてくれたもんじゃないですか。」

「それから、うまく行けば、別に真犯人もいるわけだ。コイツが第三項かな……?」

「いや、そいつはもう、実用段階でしょう。きつと、「国の」委員会をつり上げるための、きめ手の餌になつてくれますよ……。」

という会話から、予言機械を試運転したい二人が、死者の再現を機械の性能を示す材料と見なししていたと考えられ、また「死者の再現は」実際にやりがいのありそうな仕事だな。」という発言から、予言機械の製作者である勝見が、死者の再現を機械の性能実験と捉えていたことが窺える。

「ヴァルデマア氏病症の真相」では、「まだ死者に催眠術を施した者が一人もないと云ふ事」に気が付いた「私」が、死者に催眠術をかける目的として、

第一に、相手の催眠術に罹る感受性があるかどうか、第二に、若しあつたとしたら、それは死と云ふ状態に於いて害はれるものか、又殖えるものか、更に第三に、どの程度迄、或ひはどれ程長い期間、死の蚕食が催眠術を施す事によつて阻止され得るか、と云ふ事が調査される訳である。

と述べており、実験が目的だったと分かる。

以上から、「第四間水期」は「ヴァルデマア氏病症の真相」の影響を受けた可能性があるだろう。

相違点は二つ挙げられる。第一に、施術の動機が異なっている。「第四間水期」では、予言機械の性能実験という勝見の知的な興味以外に、殺人の嫌疑を避けることも目的だが、「ヴァルデマア氏病症の真相」では、「私」の知的好奇心だけが動機である。第二に、死者ないしは瀕死の人間の立ち位置が異なる。

「第四間水期」の土田は死後、本人や遺族の許可なく勝手に分析されるし、予言機械内に再現された彼の疑似人格は勝見に制御されている。対して「ヴァルデマア氏病症の真相」のヴァ

デマアは自主的に実験へ参加する。彼は最初こそ暗示に従っていたが、段々催眠術が効かなくなっていく、「私」は彼に起きた出来事について、「全体の物凄さ」や「此の世のものならぬ」特性を感じたり、「殊に異様な現象」だと考えたりしている。

これらの相違点から公房作品の主題について考えたい。ポエム作品では、ヴァルデマアにかけた催眠術が段々と「私」の母外へ移って予想だにしない事象が起こるため、死や人間にまつわる驚異と、催眠術に代表される科学の限界が提示されていると言えよう。一方、公房作品では、死体が許可なく実験に回される点や、再現された人格が科学者にコントロールされる点、被験者の土田に実験の説明が与えられない点から、科学技術やその使用者の傲岸さ、および人間が両者に支配される様子が描写されているのだろう。本作末尾で、ある予言を実現しようとする勢力による勝見の殺害が暗示されており、これは科学技術とその使用者による人間への暴力や抑圧を隠喩していると読み取れる。この結末や意思表示できない胎児が水棲人に改造されるという展開を踏まえると、死者との交信の場面も、科学技術とそれを扱う者が人間を軽視し、支配しようとしていることを表すと見えよう。また、両作品の実験動機の違いから、本作は、科学的探究が純粹に知的なものではなく、社会的な利害と結びついていることを表していると推察される。以上から、「第四間水期」は、科学技術やその使用者が、人間を軽視し、支配している様や、科学的な営みが、知的好奇心だけでなく、利害関係によつても基礎づけられていることを描いていたと考えられる。

## 結び

公房はポー作品を高く評価していたが、従来の研究で、具体的に影響関係を指摘したものは殆どなかった。それを踏まえて本稿では公房が読んだポーの翻訳を検討した後、両者の作品を比較、影響関係を明らかにした。

検証の結果、「異端者の告発」は「ウィリアム・ウイルスン」、「どれい狩り」は「ちんば蛙」、「第四間氷期」は「ヴアルデマア氏病症の真相」が素材であると考えられ、いずれもポーから設定や物語の展開が取り込まれているが、書き換えに終わっているのではなく、公房独自の主題が加えられている。本稿で論じた作品以外にも、ポーから影響を受けた作品は存在すると考えられるため、今後は別作品の比較もおこなっていきたい。

### 〔注〕

(一) インタビューが行われたのは一九七三年十一月から十二月（生前未発表）。

(二) 収録作品は、「黄金蟲」、「黒猫」、「モルグ街の殺人」、「マリイ・ロージェの秘密」、「盗難書類」（原題：The Purloined Letter）、「大

渦の底」（原題：A Descent into the Maelstrom）、「ちんば蛙」、「モンテイラアドの樽」、「告げ口心臓」、「ウィリアム・ウイルスン」、「リジーア」、「アッシヤア家の没落」、「赤き死の仮面」、「早過ぎた埋葬」、「細長い箱」、「楯田形の肖像」、「アルンハイムの地所」、「ランダアの屋敷」、「影」、「沈黙」、「モノスとユナの対話」の十一作。

(三) 収録作品は、「赤き死の仮面」、「ウィリアム、ウイルスン」、「楯田形の肖像」、「アッシヤア館の滅落」、「モノスとウナの対話」、「影」、「沈黙」、「アルンハイムの地所」、「ランダアの屋敷」、「早すぎた埋葬」、「物云ふ心臓」の十一作。

### 〔付記〕

引用文について、安部公房の小説・戯曲は初出に、ノンフィクションは『安部公房全集』（全三十巻、一九九七年七月から二〇〇九年三月、新潮社）に、それぞれ拠った。また、常用漢字に改め、適宜ルビは略した。□内は糸賀による注記、△は改行を示す。

(いとが) かん・本学大学院人間・環境学研究所修士課程)